幻のカイニス

.T.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻のカイニス

【Ｎコード】
Ｎ８２１６Ｃ

【作者名】
・Ｔ・

【あらすじ】
：：ＳＴＯＲＹ：：魔術師を目指すも、のっけから落ちこぼれてしまった少女と、自分の魔力を封じてしまいたい程の膨大な力を持つ少年。温かい家庭に育った一人と、母のぬくもりも知らぬ一人。どこまでも両極端な二人。人はどこまで分かり合えるのでしょう。どこまで遡（さかのぼ）れば、後悔は消えるのでしょう。

［序章］

…この話を、ただ語るならば。

序章：：あれは、ね。

時に言葉は
誰かを奈落の底へと突き落とし

時に言葉は
誰かの心をいとも簡単に救い上げる

時に無言は
何かを語り

時に眼差しが
心の内を伝える

大事なものは何ですか

それはひとつですか
ふたつですか

欲しいものは何ですか

それは買えますか
買えないものですか
尊(とおと)いものは見えますか
愛するものは見えませんか

誰でも孤独になりたくない
だから心より誰かを求める

愛する時も、沈む時も、喜ぶ時も、憎む時すらも。

夢の名を持ちつつ、夢見る事を手離しかけた自分の為に捧ぐ。

［一章：：奇才と凡才］１後は、なし。

そこには木漏れ日が溢れていて、
所々へ広がる不思議なほどの緑に囲まれた街だった。

ここが新しい故郷（ふるさと）。
ここが新しい僕の街。

そう心から思い、そう願った。

ー水と光と緑豊かなこの地が、皆が、
　僕の存在を疎（うと）みませんようにー

：：ー１ー後は、なし：：

人には向き不向きがあると、つくづく思った。
しっかりしたい気持ちはある。
知識もそれなりに学んだはずだ。

なのに上手く出来ない。
想像通りとは行かない。

確率は１／３…いや、それ以下か。
彼女の力量は。

5人の妹弟と両親の期待を一身に受け、アリアはこの学校へ入学した。
魔導院…まるで在り来たりの名を持つそれは、この島唯一の魔術専門校だ。
その創立は世界で最も古く、他には類を見ない王立研究所まで併設されている。
高名な術者を数多く生み、今尚新しい魔法を探り続け。
世に比べれば十年遅れと言われるこの島。
他大陸では文明が進化し、工業的な発展は今や魔術を上回った。
だがここでの主たるは未(いま)だ手作業、そして魔法へ頼る生活も当たり前。
時に時代を遡(さかのぼ)ってまで織り成される魔法が、人々の生活と深く結びついているのだ。
それ故(ゆえ)、万国からすれば衰退しつつある力と人気は、この学び舎(や)でなら昔と変わる事はなかった。

しかし魔導院はフェライナ国営であっても職業訓練校とは少し違う
勿論のこと、学費も無償ではない。

この学校に学び始め早、半年が過ぎた。
しかし実践すればする程、焦れば焦るほど己の力のなさへ少女は苛(さいな)まれ。
だからこそどうにかして形へしなければ、そんな気持ちだけが彼女の先を急いだ。

魔法は目に見えない力だ。

時に守り、
時に攻め、
また何かを治し、
また何かを壊す。

途方もないものだと思う。
見えないものを信じる事は容易(たやす)くはない。
なのにそれを自(みずか)ら見出し使いこなそうというのだから、半端な道のりではないのだ。

方向を間違えたか？
それとも己(おのれ)を過大評価し過ぎたのか？

今更考えても仕方のない事だが、知らずに気落ちしてしまう。
そう、自分の相棒たる彼を見ているだけで。

彼、カイニス・ロワードとは同い年で、また同期に入学した筈だった。
しかし類い稀なる才能と持ち前の魔力で、今や若手講師陣に劣らぬ腕前。
学院の長老たちが千年に一人の適才と絶賛する程、彼は魔法に長けていた。

その一方で、もはや落ちこぼれと言わざる得ないアリアは、さり気なく薬師(くすし)への転向を勧められる始末だ。

確かに魔力もその技量も薬学(やくがく)では一切求められない。
しかし膨大な知識を要し、学ぶ期間も最短１０年と、その道のりは果てしなく長く。

彼女の妹弟は１４歳を筆頭に5人もいる。
決して裕福とは言えない生活の中から届く仕送りに、アリアは投げ出してしまいたい気持ちをぐっと堪えた。

自分は長子故(ゆえ)にいつも、またどの服も新品に袖を通してきたが下の子たちは違う。
お下がりにお下がりを重ね、末子の弟へ至っては幼いのをいい事にアリアが１０年以上前着た女児服を着せられていた。

ぶかぶかで。
赤と桃色の、花柄の。

そんな哀れな様を知っているからこそ、こんな初歩の初歩で私には不向きでした、などと投げ出す訳には行かなかった。
何が何でも魔術を扱う者となって、両親にこの苦労の分を返してあげたかった。
今まで以上に我慢の連続を強いられているであろう、弟妹たちへ報いてやりたかった。

一後が、ないのだ。

「〜という事だから。今回はこっちの方向から行くよ。…アリア、聞いてるの」

静かな口調は、彼女の耳をするりと通り抜けてゆく。
ただただ、あらぬ方向へ向けられるその眼差し。
それは、誰の言葉も何の音も聞こえていない証とすら見え。

「…アリア」

少し低めで、強い口調がふと少女の耳へ入った。

「え？…あ、何？」

アリアが顔を上げると無表情のまま相方のカイニスがこちらを見ている。
そのまっすぐな視線。
彼女は狼狽え、思わず顔を引きつらせ。
教室の小さな机越し、向かい合って座った彼の存在を少女は見事に今忘れていた。

魔道院での学びは基本知識の机上習得を経て、実践は二人組で行われる。
しかし少女は同期生より大幅な遅れを取っていた。
初歩の躓きは後々取り戻せない話になる事が多い。
だからこそ今、彼女をどうにか導きまたいざという時の保険を兼ね、学院側はふたりを配した。
それが学院でも有名な、この奇才と凡才組であった。

「ごめ～ん。今日の演習の話だった…よね。確か」

アリアは彼の顔色を伺う様に取り敢えずの声を発したが、少年はやはり表情を変えない。
その代わり、小さなため息をついて見せ。

「…もう一度、説明するよ」

再び流れる如く静かな口調で、カイニスは予定迂回路（うかいろ）の話を始めた。
けれど特に責め立てる訳でもないそれが、反して少女の苦手な空気でもあった。

彼はあまり表情を表に出さない。
至る所で称賛を受け、そのせいで見知らぬ誰かに嫌味を言われどそれは特に変わらず。
また思わず笑ってしまうようなおかしい場面へ遭遇しても、少年はやはり似たような顔つきで眺めているだけなのだ。
それこそ、酷く物静かに。

その様を不思議に思い彼女が見つめると、カイニスは視線を避ける如く大抵、俯く。
それでも眼差しを向け続けていると、ただ少し困ったような様子を見せるだけで。

（感情の起伏が小さい人なのかなぁ）

アリアは事あるごと、自分と彼を照らし合わせてみた。
少しの事ですぐ笑い、また同じように些細な事でも泣く自分。
だがカイニスはどこか遠くから見知らぬものを見ている様な、また丸で無関心の様な、いつも不思議な空気を持っている。
同時、少女はそれを残念な事だと思った。
少年の気質は決して人を逆撫でるものではない。
ただ無愛想とも言える固い表情が人を遠巻きにさせ。
加えて群を抜いた魔力、更にはカイニスの風貌。
彼は多少垢抜けない所もあるが、顔立ちは己より遥かに綺麗であった。
だからこそこの独特な近寄り難さへ拍車は掛かり、よって少年は独りで居る事が多かった。

「もっと笑えばいいのに」

思わず口へ出た。
気がついた時にはカイニスもはた、と説明を中断し少女へ視線を投げ。

「あ…いえ、その。何でもない…です」

またもや説明を丸で聞いていなかった上に、嫌味としか取れないこ

の発言。
アリアは身が縮む思いで俯(うつむ)いた。

（しまった〜）

だが声へ出してしまった以上、あとの祭り。
彼女は引きつった面持ちで身を固めた。

カイニスは細身で身長もさほど高くないが、それでも男性だ。
二つ年下の弟ですら数年前から腕力ではアリアも適わなくなった。
叩かれもすれば一発で。

彼の次の動作が恐ろしい。
あまり口を開かない分、それは尚更に。

しかしそんな事を考える今の間も彼は何故か身動き一つせず、また
彼女も何故か彼の足下を見つめていた。

そして、沈黙は過(よぎ)る。

「本当になんでもないの。ごめんね…変な事言って。聞き流して？」

場の空気へ耐えかね、怖々(こわごわ)そう言ってみる。
それから少女が、えへへ、とその場しのぎの引きつった笑みを浮かべ。

つい恐る恐るカイニスを見上げれば、彼は小さく頷いたところだった。

少し困ったように、目を伏せて。

「じゃ、もう時間だから。広場に集合だよ」

変わらず静かな声で少年はそう言って立ち上がった。
それから何か言いたげに口を開きかけたものの、結局は言葉を発する事なく彼は踵(きびす)を返し。
途端なんとも言えない申し訳なさが込み上げ、アリアは唇を噛み締めた。

昔は人の気持ちや雰囲気を察するのが得意だった。
歳離れた弟妹たちの面倒を見ていたせいか、それとも単にお調子者だったのか、場を盛り下げない様にと周囲を気にして話す事を心掛けていたはずなのに。

（どうも上手く行かないなぁ…傷つけたかも）

仕方なく、アリアも立ち上がった。

［一章］2無言の人

＊†＊†＊†
演習、その４
＊†＊†＊†

サドラ東の森に於いて、
事前に設置された洋灯へ点火し、
半日以内に帰還せよ。

火起こし木、火打ち石類の使用は一切禁ずる。

＊†＊†＊†＊†＊†＊†＊†＊†

その日は比較的簡単な演習のはずだった。

しかしそれに反してカイニス・アリア組の評価はゼロ。
１〜３の三段階評価で０（ゼロ）だ。

要するに、落第。

魔導院の学びはアリア達が現在目指す、
初級の『魔法使い』
中級の『魔術師』
上級の『魔導師』

の三位へ分けられる。
他に最上位・賢者という位もあるにはあるが、現在生き残っているのは名ばかりだ。

初級課程は日常的に使われる実用魔法が主。
荷物の移動や軽い怪我の回復促進、そして火付けと鎮火など至って単純なものだけで。

過去の演習ではカイニスの助けもあり、1かごく稀に2の評価でどうにかくぐり抜けて来た。
しかし未(いま)だ落第だけはまだなかったのに、とアリアは落胆を隠せなかった。

項垂(うなだ)れる彼女の横に腰を下ろした少年も、同じに言葉はなく。

彼は途中ではぐれた彼女を一昼夜探し回った。
だが結局は戻ってこない生徒たちを回収する講師陣へ連れられ、帰還。
洋灯へ点火はおろか、辿り着けずにただ森を彷徨(さまよ)っていただけという評価では、彼の努力も体力も水の泡だ。

けれどそんな話より、半泣きの相棒をどう慰めれば良いのか分からず、少年は後悔半分座っていて。

元はと言えば、迂回路の説明をまともに聞かなかったアリアが悪い。
しかし何故かカイニスはそれを非難しなかった。
勿論怒った様子も見せず、ただただ黙り込み。

彼は基本、無言の人だ。

魔法のかけ方が間違っている時はそれとなり口を開くが、必要以上の話を自らすることはないし、彼女の他愛無い話にも相づちする程度。
意見はしない。

…常に一番近くへ居るはずなのに、
　何故かいつも一番遠くに居る様な気がする人。

少女はよく少年をそう感じた。

思えば、どうでもいいような話をするのは本当にいつもアリアばかりで。
どうとも取り難い無表情さは、当初彼女の内心を幾度となく締め上げた。

呆れているのか、軽蔑しているのか、それとも静かな怒りの現れなのか。

常と、どこか眺めている様な眼差しは簡単に少女を不安へ誘(いざな)う。

そんな彼が関係のない発言をしたのは過去一度きりだ。
初めてカイニスを目の前で見たあの日。
初対面で互いに沈黙したままどうにも動けない雰囲気になった、その一度だけ。

学院一の奇才は、少女からすればどこか恐ろしげに見えた。
そして顔合わせの席で、初級担当の教師にはっきり言われ。

「きみは他の子達より2、3歩遅れがある。カイニスを先生だと思

って励みなさい」

彼は終始黙っていた。
少なからず首席の少年が喜べる結果ではなかったのだろう。冷め切った初対面の場で、ひしひしと感じ。
初級前半で早速落ちこぼれの印を押された少女は俯(うつむ)くしか他ない。

そして今にも嫌味の一つ言われそうな、酷い雰囲気。
早く時間が過ぎてくれる事をアリアはひたすら願った。

そんな時だ。
静かな声が聞こえて来た。

「奇麗な色の髪だね」

と。
突拍子もなく。

驚いて顔を上げればカイニスは酷く困った顔をしていて。
その様で少女もやっと気付いた。
きっと彼も同じに、どうしようもなくこの場が怖いのだと。

ーどうかそんなに、身構えないで。

あの時、何処からともなくそんな言葉が横切った気がした。

同時、何故かこの少年は思ったより繊細なのかも知れない、そう感じ。

（でもすっごい、怖かった…あの時）

今尚、ふと浮かんだあの言葉の出所（でどころ）は分からないままだが。

そんな記憶を辿（たど）り、不意にアリアは目の前の彼へ視線を向けた。

しかし、カイニスは未だ微動だにせず俯いたままで。

「ごめんね。あたしがちゃんと話聞かなかったから…」

気落ちしたままの彼に、恐る恐る声を掛けてみる。

学院一優秀と言われて来た彼へ汚点をつけてしまった、と素直にアリアは申し訳なく思った。

もっとも、落第の理由は言うまでもなく己のせいだと皆気付くのだろうが。

「僕こそ、ごめん」

少年がやっと、ぼそり口を開いた。

しかしその不可解さに首を傾（かし）げるも、彼は視線を落としたまま言葉を続け。

「洋灯（ランプ）を見つけた時、僕一人でも点灯して…その後逸（はぐ）れた事にすれ

ば良かったんだ。そうしたら1点は貰えただろうに」

そんな予想外の発言が湧いて出た。
それでアリアは呆然とし。

「え、でもそれじゃ…ズルっこ…」

思わずそう呟き、少年と少女は顔を見合わせた。
そして間入れず互いに吹き出す。

「そうだね、確かに」

（…あ！）

彼は口元に手を当て笑いながらそう答えたが、アリアは突如その顔をまじまじと見つめた。
全ての動きを止め、なのに少女の目は何か追う様な仕草で。
瞳が瞬（またた）く。

それにどきりとしたカイニスは意識なく腕を下ろし。
たが、刹那（せつな）アリアは彼を指（ゆび）さして叫んだ。

「今、笑った！」

その明るい声は彼の目を見開かせ。

「初めて見た〜すごい！なんかかわいい！！」

「……」

途端、彼は明後日(あさって)を向いた。

なんとも形容し難い、その言われ様。

内心呆然とし、けれど急に恥ずかしいような情けないような妙な気分へカイニスは落ち込んだ。

だが追い討ちを掛ける如く、彼女は満面の笑みで彼に近寄って来る。

それから俯いた彼の顔をわざわざ下から覗き込んだり、首を傾げてみたり。

興味津々といった振る舞いが一層少女を幼くさせ。

「うん、もっと笑うといいよ！なんかあたし、今すごく幸せな気分になったもの」

「…それは良かったね…」

アリアの無邪気な発言は早速、落第の話題から懸け離れている。

それ以前、誰かから笑っただのと喜ばれた事もない。

カイニスは半分呆れながらも、過去感じた事のない不思議な感覚を覚えた。

（…僕が笑って、幸せな…）

屈託のないアリアの笑みとその言葉を思い返す。
そして少年は何故か顔が熱くなるのを身で感じた。

またそれを盗み見た少女は二度得したような気分となり、にんまりと笑いが浮かび。
何せあの無表情な少年が頬を染めた姿を、偶然にもこの目で見れてしまったのだから。

「あ～今日はいい日だ～」

上機嫌なアリアの声が響く。
けれどカイニスは熱くて仕方のない顔を未だ必死で押さえ続けた。

（なんで笑ったんだろう、僕）

そして頭の片隅で、少年は自分へ問い。
実のところ、今の今まで彼女を警戒し最低限の言葉を交わす事にすら彼は神経を使っていた。

理由は色々ある。
何せアリアの性質はこれだし、下手に関わりを持って面倒に巻き込まれるのは嫌だと素直に思い。

実習で組む彼女は言うなれば「相棒」ではあるが、実際そんな名で呼べるほど親しい間柄ではない。

あくまでこれは学院側が決めた組であり、カイニスにとってはそれ以上でもそれ以下でもなかった。

なのに。

それが何故、己はアリアと笑い合っていたのだろうか。

丸で、普通の友人同士のように。

（友達って、こんな感じなのかな…）

彼はふと、そう思った。

「…今度からは予行練習、しようね」

ぼそり呟いたカイニスの声で、きゃらきゃら笑っていた彼女の動きと表情ははたと固まった。

［一章］3贈り物

次の日、久々にアリアは街へ出た。
田舎からサドラへ出て来たばかりの頃は何もかもが珍しく、休みの度に駆け回り。
けれど最近の休日ときたら、眠ってばかりで。

それ程、この学院での学びは疲れを呼んだ。
大抵、休みの前日は夜食も食べるか否かで力果て。
翌日、朝日が差し込んでも目は覚めず。
夕方、陽が暮れ始め空が赤く染まった頃にやっと体力の補給は終わる。

そんな生活を繰り返し、ここ二月（ふたつき）は特に思いつく物もなければわざわざ街へ足を運ぶ事はなくなっていた。

寮には必要なものは何でも揃っている。
学院の生徒も教師達も殆どがこの寮で暮らしている為、校内に小さな店もいくつかあった。

パン屋、雑貨屋、靴屋、それ以外にも学費内で様々な物が支給され。
例え夜に目覚めても足りない物などなく、普通の生活を送る分には大概事足りる。

だからだろう、街へ足が遠退いても当たり前だと思えるのは。

何の不便も不都合もない寮以外へ住まう者の方がここでは珍しい。

例外と言えば地元に大きな屋敷があるアルマ・アフレッタ兄妹、それから知人宅へ厄介になっているというカイニス。
彼らぐらいなものだ。

そんな便利な日々を常とし始めたアリアがわざわざ買い物へ出たのは、妹の誕生日が月末に迫っている事を思い出したからで。

一番自分に懐いていた下から二番目の妹。
離れていても、大事な家族だ。
否、離れているからこそ、忘れていない事を妹へ伝えたかった。

（何にしようかな…やっぱりお洋服かなぁ。でもまた大きくなってるかも…サイズ分かんないなー）

色々、考えながら歩いていた。

どんな事でも考えている時が一番幸せだと思う。
些細な事で悩める事も同じに。

何だか久し振りに”普通のこと”を一生懸命考えている己が、自分でおかしくなる。
それ程、この学院へ入ってから日々魔法のことばかりだった、と。
そんな時だ。

どん、と正面から大きな衝撃が全身へ走った。
気が付けば何か大きな陰に隠れ、アリアは尻餅をついていて。

「すみません、大丈夫ですか」

痛いと思う前に頭の上から声が降って来た。
見上げれば細身の青年が屈(かが)んでこちらを向いている。
驚いた少女は、その時やっと遅れて来た痛みの感覚に顔を顰(しか)めた。

「痛い…」

泣きそうになった。
時間差のある痛みは本当に辛い。
神経の全てがその部分へ集中しているかのようで、意味なく息まで止めてみる。

眉間に皺を寄せたまま声も返らぬ少女へ、青年は再び謝罪した。
そしてアリアの正面にしゃがみ込むと、顔を覗き込む仕草で大きな手を彼女へと差し出し。

「立てますか？」

丁寧で静かな声色だった。
青年は微動だにせずアリアがその手を取るのを待っていたが、彼女にはそれどころではない激痛が走ったままだ。
声を出すのも、息をする事すら辛い気がした。
そのまま少女は足を抱え蹲(うずくま)る。

その尋常ではない彼女の痛がり様に、青年も眉根を寄せ。
膝を折り、アリアの足に触れ。

「どこが痛いのですか？」

外傷はなさそうだけれど、と青年は彼女の足をまじまじと見つめた。
それへアリアが驚くと同時、かっと頬は染まる。
見知らぬ男に足を掴まれた、この言い様のない恥ずかしさ。

（あ、あたし…）

次の瞬間、思わず彼女は叫ぶように言った。

「違うの！お尻が痛いの！！」

＊†＊†＊

青年の背におぶわれながら、アリアは痛みと情けなさで黙り込んでいた。
その下で青年は何がおかしいのかくすくすと笑う。
その態度にほんの少しアリアの気分が害されて、げんなりと呟き。

「なによもう」

久々に、そしてわざわざ街まで出て来たというのに。
肝心な妹への贈り物を物色する事も叶わず、こうして手ぶらのまま帰途へ着こうとしている今。
それには正直がっかりして、なんてついていないのだろうとただ、悲しくなった。

「痛みが治まったら今日するはずだった買い物へ付き合いますよ。荷物持ちくらいは出来るでしょうから」

まるでアリアの心を読み取ったかの様に、青年が言った。
その絶妙な間合いでアリアは驚き、思わず腕へ力を込め。
途端その下からぐぇ、と何とも聞くに堪えない声が聞こえた。

「…あの、腕をもう少し…」

どうやら青年の首が絞まったようだ。
アリアはその妙な声に笑いを堪えながら、ふと腕にぶつかる青年の首のしこりに気がついた。
何の考えもなくそれにアリアが触れると青年はくすぐったそうに首を動かす。

「これ、病気？」

アリアは眉を顰(ひそ)め思わずそう尋ねた。指先で青年の首の中央にある突起は固く、丸で石のようだ。
しかし青年はその問いへ驚き、まさか、と首を捻(ひね)って言った。

「それは喉仏(のどぼとけ)です。誰にでもありますよ」

アリアは青年の首へ回していた手を離し、思わず自分の首を触った。
それから、あ、と思い出したように再び青年の首に掴まると情けない声で呟く。

「そういえば父さんにもあった…」

無論、自分には、ない。

何故己の首を確かめる前に気付かなかったのか。
自分で呆れ、青年の背に顔を埋め。

ある程度成長した男性へ現れるその特徴。
そんな事で、あぁ、この人は大人の人なのだと今更当たり前の事を思っては急に恥ずかしくなる。

（なんであたし、おぶわれてるのよぅ…！）

今、見知らぬ青年にその全てを少女は委ね切っていた。
例え自分が被害者とはいえあまりに無防備だと知らずに悟り。いてもたってもいられなくなり。

急に黙りこくった少女へ青年は、首を傾げた。
何か言ってはならないことを口にしただろうか、と平和に。
そして内心おかしな会話だと思いつつも追捕（ついぶ）の声を開く。

「お友達にはありませんでしたか？喉仏」

そう言われ彼女はふと相棒の少年を思い出したが、彼にそんなものがあったか。
いや、その前に彼の首をまじまじ見た事など過去ないし、青年に比べればカイニスは頭一つ分ほど背が低くまだ少年の幼さが残っている。

「なかった…と思う」

つまらなさそうにアリアは答え、結局その話題はそこで打ち切られた。

「魔導院って知ってる？あたしあそこの生徒なの」

そう何気なく言うと、彼は何故か感嘆の声を上げた。

「魔法を勉強してるのですね。なかなか入れる学校ではないですよ」

青年の声が心持ち、笑う。

そんな些細な表現ですぐ、気持ちが高揚する己へ少女は苦笑し。

「でも一番へたくそなの」

思わず言わずもがなの事を言って自分でまた凹(へこ)み。

彼の背中の上で少々変わった時間を過ごすと、城下街を抜けた。

そして学院の前で青年は静かに少女を下ろし、やっと簡単な自己紹介をしてくれた。

名はネウス、港の市場で働いているという。

「都合が良い時に尋ねて来てくれれば…いつでも荷物持ちをしますから」

そう無理な約束をする訳でもなく、また押しつけがましくする事もない声。
アリアはその曖昧(あいまい)さで、ふと笑んだ。

反対に感じる、心遣い。
それは嬉しいような、はたまたもう二度とこんな目には遭いたくないとがっくりするような。
アリアはとにかく不思議な気持ちとなって寮へ戻った。

【二章：：心の裏表】1作り話

―5―

「そんな訳ないよ～」

級友の耳打ちに、アリアは笑いながら答えた。
それを彼女は真剣な目で否定し、更に言葉を続け。

「本当だって。俺、あいつと同じ街の出身だからな。地元の奴は皆知ってる話だぜ」

女にしては乱暴な言葉遣いでアフレッタ＝通称アフィが、丸で怪奇談さながらに雄弁した。
己より小柄な彼女が不思議と大きく見てしまう程、それは立派な語り口調で。

彼女が紡ぐは、正におかしな創り話。
相棒カイニスが、実は魔物だと言うのだ。
あの並ならぬ魔力、そして姿。
アフィが幼少の頃と彼は今も変わらぬ姿なのだ、と。

この国で見姿を変える装(よそお)いの術は禁忌である。
古(いにしえ)の時代からこの種の魔法は魔の手の者と扱われて来たからだ。

代償は己の身。

その姿を真似た相手に術者の魂は吸われて行く。
短時間であれば多少寿命が減るくらいのものだが、長期に渡れば消える。
気付かぬ内に、身も身体も。
本人の魂すら。

もちろん他人に成り済まし、見目を偽る事は犯罪の元だ。
だがそれ以前の話、今この大陸でそれらの術を使える者が居るとは思えないが。

闇へ属する、それ。
術者最上位の賢者が会得すると言われるが、それもまた風の噂だ。

何せ学院が賢者位を寄与した記録はここ１０００年、ない。
また学院内にこの位（くらい）を持つ師が居ない為、賢者位を授ける事は実質不可能とされ。

今はもう、この大陸に現存しないと言われる、幻の位。

広大な他大陸では可能性もあり得るが、いかんせん時代は変わり過ぎた。
不確かな魔法より、確実な工業の力。
そういう時の流れに人は逆らえないのだ。

ともすればやはり風化した、と言わざるを得ず。

無論、カイニスは誰の目にも歳相応と映った。

少女と同い年の少年。
確かに溢れ出る魔法の凄さは普通の人間の域を超えていると常々思

うが、それとこれとはまた別の話だ。
彼は人を避けるが人が嫌いな訳でもなく、付き合いを続けてみるとその細やかな気遣いをひしひし感じる。
魔は人と相成らぬ者だ。
人に親切な魔性はいない。
やはり少し無理のある話だと、アリアはくすくす笑った。

「兄貴も知ってるぜ、この話。ミゴーシュ先生も多分チェックしてるんじゃないか？カイニスを…要注意人物として」

アフレッタのその真摯な眼差しと低い声色がまた絶妙で。
え～、と驚いた様な、また有り得ないと否定している様な何とも取り難い声をアリアも上げた。

アフレッタの兄・アルマ師は魔導院の若手講師のひとりで、ミゴーシュ師共々アリア達初級の専任講師だ。
ミゴーシュ師は上級魔法を扱う魔導師の位を持つが、温和な気性のせいか中級の魔術師が主に習得する心理的術へ長けた講師であった。
魔術師は幽体のみで移動する技や、透視など専門職的な分野の種になる。
その中でも高等な『読み写し』という内心透視術を得意としていて、故に魔法へ不慣れな初級を専任、時に励まし時に悪要素の強い危険因子を見破る。
その物静かで優しげな容姿に騙され易いが、中身は至って実直な人

だ。

またアルマも気さくな性格で生徒たちには人気のある講師。
同じく魔導師の位を持ち、あまりその腕を披露しないが若手では1位2位を争う実力と言われている。

アフィの作り話が正しければ…否、彼女には悪いがそれは有り得ないとアリアはひとり頭(かぶり)を振った。

所詮、作り話はそういうものだと。

そんな時、広場に噂の師が現れ大声で言った。

「実践課題その5に移ります。組ごと並んで集まるように！」

いよいよまた次の課題の時間だ。
その場に居た学生達がわらわらと広場へ集い始め、アフレッタもそれを眺め急ぐ様に再び口を開いた。

「本当に気をつけろよ？あんた鈍臭そうだしさ」
「なっ…」

それへアリアは真っ赤な顔で抗議の声を上げ。
彼女の親切心と解るが、色んな人過去言われて来たその言葉に少女は思わず反感し。

その様をアフレッタは笑いながら、じゃあまたとでも言うように片

手を上げ広場に走って行った。

（もう～アフィの方が背も小ちゃいくせに～！）

しかし乱暴な言葉遣いでも、常と気に掛けてくれる友人。
アフレッタはそういう人だ。
内心の嬉しさで浮かぶ、困惑めいた含み笑い。

（ありがと）

アリアは心で呟いた。

それから広場へ目を向け、彼女も相棒たる彼を探す。
実技課題は毎度の事ながら身が引き締まる。
そして同じように思うのだ。

落ちこぼれでも、それなりの精一杯で頑張ろう、と。

その時カイニスがこちらを見ているのを見つけ、少女も広場へ向って駆け出した。

＊†＊†＊

「でね、アフィったら面白い事ばかり言うの」

今回は本当におかしいんだから、そう言わんばかりのアリアへ彼は内心溜め息をつく。

放課後とりあえず、中庭まで彼女を連れ出したのは良かった。
だがこの調子ではまたお喋りに時間は費やされ、予行練習はおろか今日の復習さえも儘ならないのはもはや、目に見えていて。

「最近の話で一番面白かったのはカイニスが魔物！って話かな？」

少女は楽しそうに少年の顔を覗き込む。
しかし彼は無言で目を逸らした。

「アフィの作り話だとね～カイニスは歳を取らないんだって。アフィがちっちゃい頃と今も同じ姿だから、って実話みたいに言うのよ？」

きゃらきゃら笑う少女に悪気の影はない。
しかし彼からすれば酷く疲れる時間の幕開けだ。

仕方なく彼は話へ聞き入る事にした。
勿論いつもと変わらぬ無表情さで。

「ずっと同じ姿のまんまだったらカイニス、ほんとはおじいさんってことだよね？やだー！」

…何がやだ、なのか。

よっぽどこんな話をひとり生き生き喋られる方が彼の疲労も増すと言うもので。

少年は呆れ顔で遂に口を開いた。

「…アリア。いつもアフレッタとそうやって…僕をねたにしてるの？」

今更、怒る気にもならない。

だが彼はげんなりと頭をもたげ。

「え…そんなことないよ？ほんとだよ？」

（…やっぱりそうなんだね…）

変に浮いた彼女の声でカイニスはまたがくりと肩を落とした。

その時、当の本人が何処からともなく現れ。

それとなく場の悪さを感じ始めた二人の間を割り入ぃるアフレッタは、更なる爆弾の様だ。

妙な苦笑を零しつつ、ふたりは彼女へ目を向けた。

「実習の組み替え聞いたか？」
「ううん？」

予想外の話にアリアはきょとんと返した。

「カイニスは？聞いてた？」

少女がそう話を振れば彼は僅か頷きアフレッタはやっぱりな、と明(あ)後日(さって)を向く。
どうやらそれは一種の中間結果で、実力の合った者同士を再編成する事らしい。

「またアリアでもいいか、ってミゴーシュ先生に聞かれたけど…」
「…で、いいとか答えたんだろ。おまえ」

少し刺々しさを含んだアフレッタの声が少年へ向けられ。

「ん…やっと慣れて来たところだったし」

僅(わず)か言い訳じみた声色で彼は答えた。

「えぇ！？ってことはまたあたし、カイニスと一緒？」

途端声を上げたアリアへ驚きの眼差しを向けたのは、アフィだった。言葉だけを聞けば、さも嫌がっている様だが彼女の表情は満面の笑顔で。

「よかった！あたしが他の人と組まされたら絶対嫌な顔されるもの」

「…」

それはなんとも微妙な言い口だった。
あたかも少年なら気兼ねなく迷惑を掛けられると言う様なそれだったが、変わらず少女はにこにこと笑み。

「これからも宜しく、カイニス！」

本当に嬉しそうなアリアを見て、彼も小さく笑みを零した。

「…ま、こいつに喰われねぇ様にな」

その様をさも詰まらなさそうにアフレッタが眺め、そのまま踵を返す。
またそういうこと言うんだから！とアリアから声は上がったが、け

れど彼女は振り向きもしない。
そして中庭から学院の渡り廊下へ足を上げふと溜め息をついた。

「残念だったな」

目を上げれば彼女の兄・アルマがそこへ立っていた。
それをまたつまらないと言わんばかりの顔で、アフレッタはそのまま歩き出し。

「初級1位2位のカイニス・アフィ組も、女性最上位と最下位のアフィ・アリア組も実現ならず、か」

「うるさい」

少女は不機嫌に答える。
実のところ、アフレッタは画策(かくさく)していた。
学院の一部では危険視されている奇才と、無力に近い彼女を引き離そうと。
理由はあくまで内密に、けれど実践の組み替え権限を持つのは兄・アルマではなく初級専任講師長のミゴーシュであった。

「ふたりが良いと言うなら、許可しましょう」

色々な理由をつけ、進言した彼女へミゴーシュはさらり返した。だがその声は、無理だと思うけど？という色を含んだもので。

そしてそれは外れなかった。

「ミゴの予想通りだったな。やっぱ、おまえが何か提案した所であの二人、互いに指名し合ってたって絶対。それに結構いい組じゃな…って痛いだろ！」

うしろから付いて来た兄へ振り返りざま、妹の回し蹴りは炸裂し。

「うっさい！」

言い捨て駆け出した妹の後ろ姿を見つつ、アルマは強打された臑（すね）を独り撫でた。

「あぁ…こりゃ当分大荒れだな、あいつ」

じんじんと未だ響く痛みに、妹の思いも分かる兄は微か苦笑を漏らし。

遠く、そんな裏話も知らぬ奇才と凡才組へアルマへ再び視線を投げた。

［二章］2今度こそ贈り物

―6―

その日も空は見事な程に晴れ渡っていた。
ぽかぽかとした陽気はただそれだけで人を和ます。
アリアは寮の中庭でひとり大きく伸びをした。

（…よっし。行くぞー！）

そして内心、固く強い決心。
今日こそは妹への贈り物を決めて更に送る準備をしなければ、誕生日までに届かなくなる。
彼女が生まれ育った村は、フェライナ国内ではあるものの本当に辺鄙（へんぴ）な所で、週に一度の荷馬車しか交通も運搬の手段もない。
その上、三カ所の集落を経由して最後に辿り着くような奥地なのだ。
出来る事ならば田舎では決して手にする事が出来ないような、そして思わずびっくりしてしまうような、そんな物を送りたいとアリアは企んでいた。
自分がこの城下街へ来て驚く事の連続だった、その一欠片（ひとかけら）でも遠く離れた家族に感じ取って欲しい、と。
偶然寮の入り口で相棒・カイニスと鉢合わせたが、また実技の予行練習の話など出されては！　そう挨拶を交わすなり、少女は繁華街

へと向け駆け出した。
丸でいても立ってもいられない、というように。

「おおーっと」

出会い頭に誰かへぶつかった。その反動でアリアの身は後ろへ仰(の)け反ったが、刹那、腰へ腕を回され力強く引き戻され。

「アリアか。ほんと、うちのアフィとさほど変わんないお転婆(てんば)だな」

溜め息半分苦笑し彼女の顔を覗き込んでいたのは、若手講師・アルマだった。それをさも驚いた様に彼女は目をぱちくりと瞬く。
しかし以前こんな事もあったなと今更思い出し。
けれど尻餅の二の舞は免れた事を至極感謝もし。

「あ、ごめんなさい先生…ちょっと急いでたの」

少し遅れた少女の詫びでようやくアルマはその腕を放した。

「さてはデートかな?」

師が少し悪戯な表情を向けて来る。けれどアリアも一瞬きょとんと

しただけで、すぐにきゃらきゃらと笑い出した。

「違いますよ！街までお買い物です。カイニスに見つからないうちに出ちゃおう…と…思って」

少女の語尾がどんどん小さくなる声、それにちらちらとばつが悪そうな眼差しでアルマは吹き出した。

「ってことは、また練習さぼりなのか」

つい最近、相方の少女の件でミゴーシュから苦言を言われていたカイニスを彼は思い返した。
アリアと自主予行練習を計画しつつ未だ実行出来ていない、と答えていた彼は酷く困り切った顔で。

「でもね先生、この前ちょっと色々あって…今日行かないと妹の誕生日に間に合わないの！だから見逃して！」

（…この調子じゃ確かに、難物だろうな）

アルマの苦笑は続く。

「ま、それはいいけどね。あんまり遅くならない様に帰っておいで」
「ありがと先生～！」

そして途端、満面の笑み。彼はカイニスの苦労を今更感じた。

「別に俺は何もしてないよ」

アルマは謙遜ではなくそう言ったが、少女も半ば尋ね返す様に答える。

「え？だってぶつかった時、後ろへ倒れない様に支えてくれたでしょ？あたし先週も街で大っきな男の人にぶつかって…ひっくり返っちゃったの」

その様が容易に想像出来る辺り、己の妹とやはり大差ない。
アルマの内心へ笑いが込み上げた。

「そりゃその男が悪いよ。女性の扱いがなってない」

もっとも、彼が含んだ意味を彼女が理解する筈もなかった。

「…で、カイニスとはどう？もう慣れたかい？」

今の話に関係があるのか否か。
彼がそう尋ねた時には少女も半ば駆け出し始めていた。
しかし振り返って上機嫌な声は響く。

「うん、勿論！カイニスってば面白いし優しいし。じゃ先生また明日ー！」

そのまま疾風の如く彼女は場を後とした。
その元気な後ろ姿を見送り、彼は呆れ声と似た相づちを打つ。

「へぇ…」

少年が優しい、というのはともかく。

（カイって面白いか？）

比較的無口で無表情な筈だが、そうアルマは首を傾げ。

「ま、うちのアフィと仲良しなくらいだ。アリアも相当な変わりもんなんだろう」

彼は納得する如く、独りごちた。

そうして街はいつもと変わらぬ陽気さでアリアを迎え入れた。
とりあえず土産(みやげ)屋から露天商のなおざりにされた小物まで、言葉通り隅々まで見て回る。

手持ちの資金は限られた極僅かなものだ。
少ない仕送りを切り詰め、ようやく何かひとつ手に入る程の小額。
なのにそれで取って置きの物を贈ろうというのだから、否が応でも力が入る。

あぁでもない、こうでもないと、もはや限りなく。
しかも時間がない。

「何をお探しですか？」

背後から突然声が掛かり、お店の人かと少女が振り向けば。

（…あー…）

そこには何時ぞ買い物を中断せざるを得なくなった原因の青年・ネウスが立っていた。
アリアはこの一瞬で、あの起き上がれない程の痛みを再沸し。
彼の登場に心底がっかりし。

「すぐ近くまで配達に来た所だったのですが…あなたを見かけたので」

彼女の露骨な表情へ言い訳る如く、ネウスは肩をすくめた。
けれど買い物へ付き合う約束も確かにしたのだ。
仕方なくアリアも挨拶の言葉を口へ出し。

「…こんにちは」

青年はその嫌々な声へ苦笑を漏らした。
だが嫌な相手へ気の良い声を出せる程アリアも大人ではない。
今度はネウスへつまらない顔を隠す事なく、くるり背を向け。
そして商品棚から再び品定めを始め。

「だって、あなた背が大きいんですもん」

振り向きもせず言われたその言葉に、青年ははたと動きを止めた。
その様子を少女も背後に感じながら、けれど妹への贈り物探しにまた精を出す。
邪魔されては困る、と身で答える様に、懸命に。

「…怒らせてしまったみたいですね」

少し経って、申し訳なさそうな声が聞こえて来た。
アリアはふとその手を止め、ゆっくりと振り返る。
すると、青年は声の通り浮かない顔色でそこへ立ち尽くしていて。

（なんか子供みたいな人だなぁ…）

怒られ、困って、もじもじしながら部屋の隅っこに立っている弟の姿が彼に重なった。

「違うの。大きい人にぶつかって尻餅ついて、丸一日も動けなくなるの、もう懲り懲りなの。だから声をかけてから近付いて欲しかったの」

仕方なく少女は溜め息半分、そう言い。
だがネウスからすれば予想外の返答だったらしく、驚いた顔で言葉短く非礼を詫びた。

…ただし、おなかを抱え笑いながら。

「なによもう！」

アリアは顔を真っ赤にしながら抗議の声を上げた。
けれど今の彼は失礼したと言いつつ更に失礼な態度、としか言い様

がない。

「ネウスー、カイネウス。もう行くぞ！」

その時、膨(ふく)よかな中年の大声で二人は同時に振り返った。

「なんだ、お仕事の途中だったのね」

「…さっきそう言いましたけど」

「あれ？そうだった？」

ふぅん、とアリアは慌て半分苦笑いをし。

だが青年は気にも止めずまた後で…と、ひと時なのか否かの言葉だけを告げて去って行った。

［二章］3女の子の名前

―7―

結局、妹への贈り物は多少成長していても使えるであろう赤い木の実の飾りがついた帽子に決めた。
そしてふと目に止まった掘り出し価格のブローチ。
化粧箱が破損し投げ売りされていたとはいえ、品物自体は至って美品だ。

帽子を買い僅か残ったお金と念のため持参した食費を足し、彼女はそれも手に入れた。
これで当分は素寒貧（すかんぴん）を免れないが、とりあえずは良しとし。

妹弟達5人を世話しつつ家の一切を切り盛りする、この世で一番大好きな、母の為だ。

少女は緩やかに歩きながらふと思った。
自分が何故、魔法使いになろうなど思ったのか。
今となっては随分大それた夢だったと言わざる得ないが、それでもまだ諦めだけは不思議なほど湧いて来ない。

理由は簡単だ。

貧しさ。
それ以外にない。

都会の恩恵と田舎の恩恵は確実に違う。

アリアの故郷は辺鄙ゆえに村全体が貧しかった。中には子を売ったり、森へ置き去る親も少なくない。
そんな苦しい生活の中で少女と弟妹達は両親の愛情に恵まれ、細々ながらも仲良く懸命に生きて来た。

家を支える父、内を守る母。子供の筆頭たる己も言いつけられる事なく下の子達をよく面倒見て。

子供は成長する。
大きくなればなるほど食は増し、着物も古くなる。
家は手狭となり、粗末な布団へ皆がぎゅうぎゅう詰めで夜を過ごしたあの日々。

その苦労をアリアは知っている。
いつかはこの家でも口減らしが為されるのだろうか、友達の幼い弟が突如消えた時思った。
けれど後で気付いた。

決して投げ出さず諦めない両親の強さ、それが何よりの恵みであったと。
世の中には己の都合で子を平気で捨てる親は五万と居るのだ。

誰かが言うからするのではなく。
親がそうしろと仕向けた訳でもなく。
感情は自発的な物。

心から生まれものは揺るがされず、強く己に残った。
しかしまさか二つも買えるとは、と彼女が思わず満悦の笑みを浮かべた時。

「荷物持ちは不要ですか？」

少し離れた所から声が聞こえた。
先刻の言葉を覚えていたのか、少女と１０歩ほど離れた所にカイネウスは立っていて。

「うん。どっちも軽いの。それにすぐ届物屋さんへ置いて来なくちゃならないから」

少女は自分から彼へ近付いた。それから背の高い青年の顔を見上げるようにして笑う。
その様子に彼も安堵したのか、同じように微笑みを浮かべ。

「すごいの！妹のお誕生日祝いを買いに行ったのに、ママにもブローチ買えちゃった」

話の前後をよく理解し得なかったが、青年はさっきと打って変わったアリアの上機嫌さに思わず頬が緩む。

「お母さんにも贈り物ですか。うらやましいです。僕には母がありませんから」

カイネウスの言葉で少女は目を見開き、そして眉根を下げた。けれどすぐ何か思い直した様に青年を見つめ。

「いつか…あたしにもそういう日が来ちゃうと思うから、今のうちなの」

それから少し、アリアはしょぼくれた。

―母がありませんから…

正直、今しがた言われたネウスの言葉で衝撃を受け。

しかし本人を目の前として、何が言えようか。

この時代、この世界、親なき子は溢れる程いる。また生き別れの兄弟達を含めば更に不幸の意味合いは増すだろう。

少女はまだ幸せ者であった。

例え貧しくとも、家族がそのままに在るのだから。

そして苦労、困難、貧窮(ひんきゅう)は優れた教師である、そう教えてくれた両親がいた事。

努力しても貧乏を脱せない時は必ず訪れる。

だがそれを憎めば毎日が辛くなる事など分かり切っていた。

要はそれをどう乗り切るか。
どれだけ忍耐し、そして人生に於いての応用力と変え、発揮出来るか。

いつの時も、道は平坦ではない。
親と生き別れる日も、いつか来る。
明日の事は誰にも分からない、その言葉の通りに。

黙り込んだ少女へ青年も無言を返した。
彼女が己の一言で沈んだのをこの目で見た。
そんな些細な事でしまった、など思い。

カイネウスは自分より大分(だいぶ)低いアリアの頭へぽん、と優しく手を乗せた。
それで目を上げた少女に返って来るのは彼の困った様な双眸(そうぼう)で。

「…やっぱり、悲しかった？」

置かれた手をそのままに彼女はか細い声で尋ねたが、青年は緩く頭(かぶり)を振る。

「物心がついた時にはもういませんでしたから、平気です」

そう言いながらも淋しげなカイネウスを少女は眺める如く見た。

それから自分の頭に置かれた手を取り。

「あたし、魔法使いには向いてなかったのかも…って思う度に、思い出すの」

今にも泣きそうな顔で、アリアは彼をまっすぐに見た。
故郷に母はいる。
だからこそ、思ってしまうのだ。

母に逢いたいと。

カイネウスのように、もうこの世に居ないと知っていたなら強く生きる事も当たり前になるのだろうが、いくら大きく成ろうと所詮、誰もが人の子で。

自分が弱れば思い出す母の姿を、その優しい手を。

魔法使いとなって家を安定させたい思いと、自分には無理だったと帰って抱きつき泣いてしまいたい思い。
その両方は常と共存し、日々アリアの背にのしかかっていた。

表には出さずとも、落ちこぼれの日々は過去ない程に辛く長い。
だがそれでも帰る家を持つ彼女はまだ幸せなのだと己へ言い聞かせ。

「いいと、思いますが」

困った様子で青年が屈むようにして、アリアの顔を覗き込んだ。
そしてそのまま言葉を紡ぐ。

「私が弱い時にこそ、私は強い。という言葉を聞いた事があります。自分は学がないので正しい意味は知りませんけれど…心の支えはあって許されるものではないでしょうか」

静かな慰めの声。
それに学院の相棒を彷彿し、それからアリアはゆっくりと頷いた。

「…うん、そうだね。それに私の組の相棒さんは強い人だから…そういえばあたしには力の支えもあるや」

えへへっ、と子供がするようにアリアは笑い、大人がするようにごめんねと一言、彼女は謝罪した。

「元気に、なりました？」

確認する如く、青年は再び少女の顔を覗き込んだ。
すると彼女はこくり頷いて。

「勿論！あ、それより…変な事聞いてもいい？ほんとは名前、カイネウスって言うんでしょ？」

「はい…それが何か？」

どこにでも居る名前だと思いますが、そう青年は首を傾げた。

「あのね、学院であたしと一緒に勉強してる子にカイニスって子がいて」

その名の響きが似ている、そう付け足す前に彼は小さく笑い。

「それは不思議なご縁ですね。どんな女の子なんですか？」

機嫌良くそう尋ね返したカイネウスへ少女は吹き出した。

「やだ、男の子だよ～しかも学院の首席だから、魔法がすっごいの」

丸で身内自慢の様にアリアは彼の説明をした。

成績が学年一なのは勿論のこと、入学当初から学院全体の首席でもある事。

それに自分にとっては先生と変わらない存在である事。

「ちょっと恥ずかしがり屋さんなとこがあるけど…優しい人だよ」

そこまで言うと、青年は何故か再び首を傾げ。

「でも変ですね…カイニスという名は女性名では？」

「え」

アリアは目を丸くした。

「彼は多分…私と同じ名前で…ほら、よくあるでしょう。男性ならアレクサンドル、女性ならアレクサンドラとか」

それと同様に男性名ならカイネウス、女性名ならカイニスとなる、そう青年が続け。

「…って事は、カイニスってほんとは女の子！？」

思わず叫ぶ様に見上げれば、彼はくすくすと笑った。

「どうなんでしょうね。でもこの島では母方の姓を受け継ぎますけど、他の大陸では父方を受け継ぐと聞きますし。名前でも色々あるのやも知れません」

そんな説明を聞きつつ、アリアの内心で妙な企みの笑みは生まれる。

もし女の子なら、もっと仲良くなれるのではないか。
それに例え男の子であっても十分からかいのネタになる筈だ。
それは出所の知れぬ魔物という作り話よりよっぽど面白そうで。

（明日カイニスに聞いてみよう…！）

おかしな楽しみは、少女へ変なやる気を起こさせる。

「どぉ～れ、まずは荷届屋さん探さなくっちゃ！」

元気に踵を返し、青年がお供するように後へ続いた。その様があまりに子供じみていて、カイネウスは独り含み笑う。

ーあんまり彼で遊び過ぎない様にね。

そう青年は小さくが呟いた。
だがその不可解な言葉は広い街へ溶け入り、アリアの耳には届かなかった。

［三章：：謀］１正直に

－８－

フェライナでは年に一度、盛大な祭りが開かれる。
この街に魔法の学校が設立された由来、剣と魔法による闘いの伝説を称えるものだ。
剣は傷付ける事しか出来ないが、魔法は癒す事も出来る。
それ故（ゆえ）、武力で攻め入った大軍へ当時小国であったフェライナが勝ち続けた、言わば英雄伝を祝う祭りで。
期間中は所々で魔法が惜しげもなく使われ、学院からも奇才の相棒・カイニスを始めとした成績優秀者が表舞台に立つ。
級友アフレッタもその一人だ。
どうやら彼女も魔法に長けた家系らしい。
フェライナ国宮廷魔術師を務める彼女の父と、学院の講師の兄とで今日は何か披露するのだという。
だが、落ちこぼれのアリアはそんな催しもあくまで観覧するだけだ。
「どうやって伝えようかな…」
待ち合わせた場所で”とりあえず”の挨拶を軽く交わしカイニスが

振り返ると、アリアはあらぬ方向を向いたまま口を閉ざした所だった。
ただの独り言か、それとも自分に助言を求めているのか分かり兼ねる様(さま)だ。

皆が祭りに舞い上がっている最中、次の実習で行われる内容を予行しておこうなど提案した事自体が間違っていたのかもしれない。
けれど度々中止もとい延期されて来たそれを実行へ移すには良い機会の筈だった。

魔法の祭りは形異なれど結局は人力(じんりき)。
催し物は数時間ごと休憩が入る。

その僅かな待ち時間を捕まえ、きっと数々の魔法を見て高揚しているだろう彼女に練習させるのは計画上では易(やす)い話だったのだが。

未だ物言わぬ彼女にカイニスもしばし沈黙し、目の前の悩める姿へ思わず見入った。
それでも次の言葉を発する事はなく。
また自分の視線にすら気付きもせず。

そうして彼も彼女に少々困り出した。
アリアと実技で組み始めてから、今まで苦労も準備もいらなかった学びが今や一大事へ変わり果て。

二人が組むという事は共同作業だ。

片方が甘やかしても、また仕切り過ぎてもならない。
固(もと)よりカイニス一人でなら難なく全てをこなすのだろうが、それでは意味を成さなくなる。

彼女へ彼が相棒とし宛てがわれたのは、その足りない部分を補うが為。
少女が魔術を扱う者とならねば、それこそこの組自他が無意味となり。

少年はなるべく順調に事が進む様にと予行練習を提案しアリアも納得した。
けれど、過去その約束が果たされた事はない。
そしてまた今日も、思わぬ所で立ち往生し。

そもそも今日彼女と待ち合わせたのは予行練習の為であって、悩み相談が目的ではないのだ。

しかし、以前と比べ彼は心の余裕が少し持てる様になった。
残念ながら彼女の魔力は未だ微々たるものだったが、代わりにアリアという人間がどういう性格で、そして咄嗟(とっさ)にどういう行動へ出るかが分かり始めたからだ。

彼が稀代の魔術師などと呼ばれていたせいか、当初彼女はカイニスに対して身構えていた。
彼もそれをどこかであしらうような態度で応対していたが、少女が少年に慣れ始めると緊張が解けた分、色々な姿を見せ始め。

もっとも、それは予想していたより少々気が抜けるような事ばかりだったが。
というのも彼が予想していたアリアという人は聞きたがりやでおせっかいで、自己主張は強く我儘で…
平たく言えば、迷惑な人。

そうとばかり思っていた。
しかし本当にアリアという人は的(まと)が外れ。
今日のように訳の分からない発言、意味のない行動。
マイペースで常にぼーっとしていて、あくまでも平和主義・平和的考え。
そして人の話を聞いていないかと思えば正に地獄耳のごとく、彼の小さな呟きを聞き逃さなかったり。
丸で掴めない。
思わずこちらの調子が狂う程に、日々、分からない。
端から見れば迷惑極まりないのは確かなのだか、それでも何故か怒る気にもならない不思議な無邪気さを持つ少女。
どこか大人のような、そうでもないような。
アリアはそんな人だった。
…何と返そうか。
己が何かを言葉としない限り彼女はどうにも動きそうにない、そうカイニスも悟り。
こんな様子では全てが無駄になる。
予行練習の話など耳からすぐに抜けて行くだけ。
分かり切っていた。
しかし彼女の言葉は時に難しい。

カイニスはどうにも理解出来ず、何と言えば良いのか見当すらつかなかった。

しかしこのままではどうにも困ると少年はおかしなほど悩み、それから口を開き。

「正直に言えば伝わるんじゃないかな？」

当たり障りのない言葉はするりと出た。

その声へアリアはくるり振り向き、しかし納得が行かないとでも言いたげな表情を返す。

「それが難しいのよう」

やはり自分の発言を待っていたのかと思う反面、胸を撫で下ろし。

当てずっぽうなカイニスの言葉は酷く見当違いでもなかった様だ、と。

「何故？」

そう尋ねれば、少女は途端に顔を赤くした。

（…意味が分からない）

何故だろう、よっぽど己が恥ずかしくなるこの雰囲気。
彼までもが言葉に詰まる。
そしてその空気へ耐えかね、カイニスが思わず明日の予行練習の話を振ろうとした時。

「正直に言うっていう事は、相手に拒否された時つらいよね？」

アリアの予想外の言葉で、彼は弾かれた様に目を開いた。
別に己へ対して言われたでもないその表現が、少年の胸を抉り。
丸で自分の内心を探られたような、苦々しさ。
見えぬそれが頭を過る。

「そんなに…深刻な話…なんだ？」

カイニスが恐る恐るそう問うと、少女は何故か不思議そうに首を傾げた。
今の発言に深い意味はない、と言いたげに。

「普通の会話でも基本はそうじゃない？誰でも否定されたら嫌だもの」

でもね、そう言いながらアリアは笑んだ。

「肯定されたら、自分も同じだよって言われたら嬉しいじゃない？だからあたし、迷ってるの」

少女は僅か高いカイニスの目を見上げた。
その真っ直ぐな眼差しへ少年も無言のまま、ぼんやり視線を合わせ。

（…なんだ）

アリア論。
彼女らしい考え方。

そう彼は思った。
同時、カイニスは知らずと安堵の息をつき。
自分の中で突と気持ちが反転したのを身で感じ。

気付けば、笑んでいた。

「…なら、頭で整理してから…順を追って丁寧に話せばいいんじゃない？」

カイニスはそう答え、目を細め。

彼女は出来ない事が多い。
弱々しくて失敗する方が得意で。
正直はらはらさせられる事の方が多いのに、アリアはそれでもしっかりと自分で立っているのだ。

他の人間なら諦めるほど失敗を重ねても、それでもめげない。
カイニスからすれば、それは尊敬へ値し。
時折、楽天過ぎると脱力もするが。

そして同じ様にほっともする。
彼女は大丈夫なのだと、丸で己の事の様に。
だが何故、そんな気持ちが湧くのか彼は未だ理解していなかった。

その時、突然アリアがつかつかと歩み寄ってその横に立った。
彼は今度は何事かと思わず身構え、緊張した面持ちでそろりと彼女の方を向く。

「あ、なんだカイニスももう大人なんだ」

アリアお得意の謎発言が出た。
まじまじと、しかし何故か真横から見つめられカイニスは困り顔…
否、半ば呆れ顔をし。

「もしかして、喉仏のこと？」

その名答へ少女は目を丸くしたが、カイニスはやはり全く以(もっ)て呆れ果てたと大きな溜め息で返した。

「最近それ、色んな人に聞いてるでしょう」

ミゴーシュ先生がおかしそうに言っていた、とカイニスは疲れた声で付け加える。
この前、彼が提出課題を持って師の研究室へ行った時のことだ。
帰り際、

「君はあれ、聞かれた？」

と、誰かに似た謎の問いかけをされ少年は思わず立ち尽くした。
いつもは物静かな師が、必死に含み笑いを堪えていたのである。
詳しく聞けば、アリアと廊下ですれ違うなり、

「先生、喉仏ある？」

と突然聞かれミゴーシュは正直、度肝を抜かれたらしい。
しかも師の研究室からの帰り道、似たような話を他の師からも聞かされ。
きみの相方は笑いの素質だけなら十分と太鼓判を押された…という所だけは彼女に伏せたが。

「アリア、喉仏は男の人なら皆あるんだよ」

言い聞かせる如くカイニスが言うと、途端がっかりした様に少女は視線を投げ。

「あたし、カイニスにはないと思ってた」

「…」

彼は知らずと閉口した。

それはどういう意味なのか。

カイニスは男ではないとでも言うのだろうか。

それとも皆にあるはずのものが少年には欠けているとでも言いたかったのか。

色々考え、だがそのひとつは的中した。

「だってカイニス、ほんとは女の子なのかも！って思ってたの」

「…は？」

また妙ちくりんな発言に彼は呆然と口を開き。

「あたしの知り合いがカイニスって女の子の名前だって言ってたから…でもちょっと残念だなぁ」
「…」

彼は再び閉口した。
しかし追い討ちをかける如く少女が近寄って来る。

「ね、胸。触らせてくれない？」

「…え？」

今度こそ少年は思考すら止まり。
答える間もなくぺたぺたと服の上から触られ、やっぱり胸ないんだー、など独り納得され。

彼は思った。

（相変わらず、分かるようで解らない人だ…）

なんだか自分が阻害された気がし、カイニスは常と静かな声を更に細らせる。

「…聞いて回るのは程々にね」

結局、彼の提案した”実技予行練習”は、その日またも計画倒れで終わりを告げた。

［三章］2まどろのみの時

―9―

祭りは続く。

魔法の花が空を踊り咲き、無数の色は風へ乗って街々を彩(いろど)り。
いつも以上の活気と溢れ返る人々の笑みは、このフェライナを一層盛り上げた。

街角で様々な魔法に出会う。
色々な人によって作り出されるそれは本当に多種多様で。
少女の視線は、あっちへ行ったりこっちへ行ったりを繰り返していた。
放っておけば糸の切れた風船の如くふらり消えそうな彼女を、彼はくすくすと笑う。

いつしかアリアの友人となった青年・カイネウスと待ち合わせ、ふたりは祭りへと繰り出していた。

初めて、その手をつないで。

最初は逸(はぐ)れない為だけだったのだが、ごった返る道を抜けてもその手が離れる事は結局なかった。

何故か不思議な気分になる。
ただ、手をつないでいるだけで。
安心する様な、心が波打つような。

少女は故郷を彷佛(ほうふつ)した。

昔、すぐ下の妹とよく手をつないで歩いたあの頃。
なのに、それとまた違う感触が今はある。

青年の手はアリアよりも二周り程大きい。
それから何故か、彼の背へおぶわれた時を思い返した。
いつもの自分とは明らかに異なる視点の高さ、隣へ立てば見下ろされる視線。
つい苦笑は過(よぎ)る。

…初対面は最悪だったな、と。

最初カイネウスは随分と失礼な人だと思った。
けれど人の印象というものは本当に日々、変わってゆくものだ。
いつしか、優しい話し方を知っている人だとも知った。
今でも時折からかわれている様な感に陥りもするが、根の誠実さは会う度に実感する。
常に言葉少なげでも、それすら不思議な感覚と相乗し。

今では彼と過すのは安らぎの時。
またアリアが魔導院の学びから唯一解放される時間でもあった。
自分で希望してこの道に進んだとはいえ、魔術の修得は並ならぬ努力が必要だ。
ましてや初級最下位の成績を保持し続けるアリアに、学院で心休まる場所などあるはずもない。

いつしか彼は彼女の逃げ場所になっていた。

「でね、失敗すると全部こうよ？”だってアリアの魔法だから”って…ね、酷いでしょ？」
「…ふふ」

「あー！今の笑い！！ネウスも馬鹿にしてる！」

思わず拳を握った少女へ危険を感じたのか、彼は咄嗟（とっさ）一歩退いた。
なのに、繋がれた反対の手は変わらずそのままで。

「いいえ。魔導院は地元の人間からすれば高嶺（たかね）の花…というかとても高等な術を学ぶと分かってますから。最初はみんなそんな物なのでは？」

話をすり替える如く、青年がにこり笑う。
失敗話も笑い話となるこの場。
アリアはその妙な心地よさに困り果てた。
間違っても級友へは言えない弱音。
それをこっそり、ここで散華して。
少女が無意識に彼の手をきゅっと握る。
するとそれへ呼応する如く、カイネウスも握り返して来た。
そんな些細なやりとりで心臓が脈打ち。

丸で恋人同士か何かの様な空気が背を撫でた。

「あ、あ！そういえばカイニス、やっぱり男の子だった」

気恥ずかしさを隠し言えば彼はただ、へぇと相づちを返す。

「そうでしたか」
「うん。ちゃんと喉仏があったし、胸はなかったし…でもほんと、女の子だったら良かったのに」

酷く残念そうな少女を、彼はおもむろに抱き上げた。

「！？」

一瞬何が起こったのか、そう少女が思うほどふわり、自然に。
だが子供抱きなのはわざとなのだろうか、片腕に少女を抱(かか)えカイネウスは辺りを見渡し。

「アリアは僕の元気の元ですよ」

青年がぽつり言う。
その突拍子ない言葉とは裏腹な彼の横顔。

遠くを眺める目元は変わらず柔らかなそれだった。

「魔導院の学生さんに話を聞ける機会なんて滅多にないんです…しかも失敗談なんて」

青年が本当におかしそうに、くしゃりと笑う。
その隠す事ない表情へアリアの鼓動が高なるも、つい言葉は先を行った。

「…やっぱり馬鹿にしてるのね！？」

少女は真っ赤な顔で憤慨す。
しかしそれと同時、湧いて来るのは不思議な安堵だ。
彼の腕へ在り、内心はどくどくと物凄い動悸なのに。
ぴったりくっ付いた身が必要以上の熱を上げるのに。
けれど必ず付いて来る平穏。
それが酷く不思議で。
思わず彼に見蕩(みと)れ。

（…もう、あたしってば！）

その時、青年が何故か溜め息と似た深い息を吐いた。
それから少女の髪を一撫でし。

「…昔、近所の子が魔法使いになりたがってて」

カイネウスは、ぼんやり口を開いた。

「小さいのに魔法が凄く上手だったから…羨ましくて。あなたにそれを少し重ねてました」

何か思う所でもあったのか、言い訳じみた声はぽつりぽつり彼の内心を語り出して行く。
それをアリアも不思議に思いつつ黙って聞き続け。

「ちょっと利かん気が強い所とか、似てるんです」

青年は話を区切る如く微笑を漏らした。
いつも聞き役へ徹する彼。
今更アリアは目を丸くし、カイネウスを正面から捉えた。

「どうかしましたか？」
「なんか…ネウスってあんまり自分のこと喋らないから、びっくりしちゃった」

それは彼の話に対する感想なのか否か。
もっと色々聞いてみたい、そうアリアが感じた時、不意に彼の表情が申し訳なさそうなものへ変わった。

「…すみません。実はこれから、どうしても断れなかった仕事へ行かなくてはならなくて…」

遠慮がちな言葉。
アリアは突然微睡(まどろ)みと似た心地良よさから現実へ戻された。
そしてそっと腕から下ろされ、驚いた様に青年を見上げ。
しかし身を屈めた彼がその身を起こした時には、少女もにっこりと笑みを返し。

「これだけ盛大なお祭りじゃ、人手はどこも足りないもんねぇ…気にしないで？」

口では言いつつ、内心は残念な気持ちで一杯になっている。
たが、本当は彼もアリアの為に時間を割(さ)いてくれたのかもしれない、そう思ったら引き止める訳にもいかなかった。

「…大人ですね、あなたは」
「？」

返された言葉へ少女は首を傾げ。

「さっきの話の…魔法が上手な子には帰り際よく駄々を捏ねられたから」

「…」

その言い様は丸で子供扱いだ。

アリアは文句のひとつ言いたくなったが、青年の悪戯めいた表情に口を噤まされ。

初めて見た、その顔つき。

初対面が何とも言い難い形であった為か、ずっと彼はどこか慎み深い様な態度で。

日頃の姿を今になって思い返し、少女もぼんやりと視線を返した。

今日ふたりで祭りへ出掛けたのは意気投合。

どちらかが先に誘った訳でもない、一種成り行きのようなもので。

なのに何故だろうか。

待ち合わせた時の軽い気持ちは今、別れるのを拒む重い気分へと変わり果てている。

そう、自分の中の気持ちはこんなにも変化した、そうアリアは己を悟った。

「あれ？怒らないんですか？」

やはりからかっていたのだろう、彼はしれっと言う。
それが少々悔しく、だがアリアは知らずと真っ赤になった。

「ネウスは子供のお守り得意そうね！」

嫌味のつもりだったが決してそうは成り得ず、青年はにこにこしている。

「えぇ。世話が掛かる子ほど可愛いものですよ」
「…！」

丸でそれは己へ言っているも同然なのではないか。
少女は今度こそ何か言ってやろうと思ったが、彼の表情を見た途端それも消え失せた。
淋しそうな、もう少し一緒にいたいと言っている様な色がアリアにも確と読み取れて。

「ではまた…今度、ゆっくりお会いしましょう」

名残惜しそうに青年が言うと、彼女も今しがたのがっかりへ拍車は掛かった。
けれどそれをおくびにも出さず頷く。

「じゃ、また」

元気にそう言ってアリアはカイネウスと別れた。
本当に次があるのか、そんなことも考えずに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8216c/

幻のカイニス

2010年11月12日00時50分発行